



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	社会科地理的分野における日本の農業に関する授業実践： これからの日本の農業のあり方を考える(fulltext)
Author(s)	上園,悦史
Citation	研究紀要/東京学芸大学附属竹早中学校(48): 11-20
Issue Date	2010-05
URL	http://hdl.handle.net/2309/109372
Publisher	
Rights	

社会科地理的分野における日本の農業に関する授業実践

～これからの日本の農業のあり方を考える～

上園 悦史

要 約

本実践は日本の農業の現状や課題を学習した上で、生徒自身が考える農業活性化プロジェクトを提案し、将来の食料の安定供給や日本の食料政策に関する基礎的な知見を養うことを目的としている。日本の農家が抱える高齢化・不安定な収入・後継ぎ不足などは今後の日本の食料政策に大きな影を落とす問題である。本実践ではそうした課題を克服する視点を、生徒の話し合い活動を通して様々な意見を出し合い、よりよい活性化プロジェクトを模索していく過程を重視している。また、提案事項についての適否について根拠をもった説明ができる資質を養う上でダイヤモンドランキングを採用したことも本実践の特色である。

キーワード 食料問題 米 農家 日本の農業 活性化 耕作放棄地 ダイヤモンドランキング

I. はじめに

多くの生徒たちが抱く農業のイメージは、「大変そう・地味・もうからない・重労働・衰退している」ⁱといった悲観的なものが多い。たしかに、2008年の日本の販売農家の数は175万戸ⁱⁱで、その数は年々減少し、農業所得が主となる主業農家も約2割にすぎないのが現状である。日本の農業構造の特徴として、主業農家の減少、農地の減少、農業従事者の高齢化があげられるが、このまま農業は衰退する方向に任せるほかないのだろうか。

さらに私たちの『食』をめぐるのは、「食の安心と安全」を願うのとは裏腹に、日本の現実には「食の不安と危険」にさらされ続けている。ⁱⁱⁱ自給率が低く、多くの輸入される食材に依存しなければ、もはや日本の食卓が成り立たないことは周知の事実である。なかんずく輸入食品に占める割合を高めてきているのが中国製品である。輸入される野菜のうち中国製品の占める割合は5割を超している。2007年に起こった中国産冷凍ギョーザに農薬が混入した事件以降、“中国産は危険だから食べたくない”といっ

た消費者の意識が働いて、スーパーから一時期冷凍食品が撤去される事態が起こったが、現実には中国産の食材がなければ日本の外食産業は成り立たないことは言うまでもない。

生徒の中には「将来やりたいとは思わないけど、なければならぬ産業だと思う。」といった私たちの食を支える役割に注目した意見や、「輸入自由化にともない、海外の農業に負けた」といった市場経済の浸透や農業政策の保護主義的傾向が農業衰退の原因であることを鋭く指摘するものもある。

このように、なぜ日本は兼業農家だらけになってしまったのか、なぜ農産物を輸入に頼らざるを得なくなってしまったのか、農業はこのまま衰退していくしか道は残されていないのか、衰退しているといわれる農業を再生・復活させ成長させることはできないのであろうか、こうした疑問や問題提起を軸に本単元は、日本の農業の特色を知り、その課題や問題点をふまえた上で、将来の日本の農業のあり方を展望する授業を目指している。

II. 単元の構想

本単元は中学第1学年地理的分野「世界と日本の資源と産業」の「日本の農業」に該当する。

農業政策は国の安全保障の観点から極めて重要な場所に位置づけられていることはいまでもない。しかし、今の日本は国家としての食糧安定供給に戦略的な政策を描けないままである。自民党政権下においては、農業の保護政策を全面に打ち出し、海外からの輸入を制限し国内の生産者の「競争力」を失わせる形で農業を保護し続けてきた。その結果が、高齢化と少子化、後継ぎ不足による食糧増産の挫折と減反政策による取り戻せない農地資源の浪費である。

その農家に対する戸別補償を政策マニフェストに掲げているのが鳩山内閣である。農家の窮状を救う手立てとして歓迎されているむきもあるが、一方で予算のばらまき、経済効果が不明確との批判もある。農家の戸別補償に費やされている財源の確保にも不安材料があり、結果的には国民による税金の支出という面からすれば、農家だけが補償の対象になることへの税負担の公平性という観点からも懸念が指摘されよう。

もちろん中学校1年生の段階において、農家の補償の財源や税負担の公平性までも考慮にいれさせることは無意味である。その答えは3年生の公民的分野の学習まで待たなければならない。しかし本単元においては、1年生の地理での学習内容をふまえて、いかに日本の食の将来を案じ、その改善に向けて知恵を出し合う活動そのものに一つの意義を見いだそうとするものである。

そこで、日本の農業の特色を様々な資料や統計から読み解きながら、日本の農業政策の変化や、世界的な視野から人口増加と食糧需給バランスの変化、将来の食糧不足を懸念した各国の食糧争奪ともいえる状況を知り、日本の農業のあるべき姿について生徒たち自身に考えさせるきっかけとなることを期待している。

III. 単元計画

1 単元名：「これからの日本の農業」（全3時間）

第1時「日本の農業はどのような特色があるのか」（稲作中心、集約農業、米価保護による減反政策など）

第2時「食料自給率はなぜ下がったのか」（高度経済成長期の集団就職、日米の貿易摩擦、WTO 貿易自由化、世界の米市場、海外農地争奪の様子）

第3時「農業を元気にする企画を考えよう」（本時）

2 単元のねらい

- 日本の農業の実態について、農業従事者、生産額、高齢化率などの変化を様々な資料・グラフ・統計を用いて多角的に考察する。
- 日本の食料自給率の低下の要因について、他の先進諸国との比較検討をしながら、工業の発展と農業の衰退との表裏の関係について、政治的・経済的要因から考察し、相互に関連づけて理解する。
- これからの食の将来をめぐる話し合い活動を通して、自分の認識を深め、自分と異なる意見を受け止めながら、自分なりの意見を論理的にまとめ表現する。

3 本時までの学習の流れ

第1時 「日本の農業はどのような特色があるのか」

- ▶ 食料価格の高騰や偽装事件などのニュースから、食の安全性をめぐる問題に関心をもつ。
- ▶ 国土に占める農地の割合や半分は水田であり、米国の大規模な企業的農業と比較して、少ない人手で効率よい収穫をあげる集約農業であることなど、日本の農業の特色をおさえる。
- ▶ 米の作付面積の推移や都道府県別の米の収穫量から地域の特色を探る。

<ul style="list-style-type: none"> ▶ 米の価格の推移と生産調整としての減反政策を結びつけて理解する。
<p>第2時 「食料自給率はなぜ下がったのか」</p>
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 食材を購入する際に安全・安心を判断する基準を考えながら、食の安全について関心をもつ。 ▶ 外国産に対する不安があるものの、輸入に頼らざるを得ない日本の食糧事情を知る。 ▶ 自給率低下の要因を、戦後の集団就職による農家の働き手不足、日米貿易摩擦、WTOによる貿易自由化と関連づけて理解する。 ▶ 世界の米の備蓄量の推移、中国の米消費量と生産量の推移、世界の米市場の取引高の増加などの資料から、米の備蓄が減少しているものの、米市場は活発化している様相を捉える。 ▶ 穀物の価格が急上昇した2007年の食糧危機を発端に、各国の食料安定供給政策について理解し、あらためて自給率の低い日本の食糧政策のあり方を考える態度をもつ。

4 本時のねらいと指導上の留意点

(1)ねらい

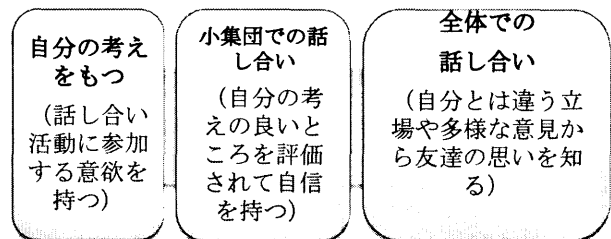
農業に対する生徒の意識の根底には「廃れつつある」「衰えつつある」農業観がぬぐえない。昨今の経済不況の中で日本政府の打ち出す景気対策は中長期的な視点を欠いた一時しのぎの政策が目立っている。高速道路の無料化や一律料金の設定は、即時的には利用者の増加による経済効果を生み出した。また、自動車のエコカー減税や補助金措置なども消費を促す景気刺激策としては一定の効果をあげつつある。そのため、農業を活性化する方策を試案するにも、現在の景気刺激対策の影響が色濃く映し出されてくることになるであろう。例えば、農業の補助金や減税対策である。しかし、既に農地に関しては固定資産税・相続税減税が行われている。さらに災害を受けた場合に真っ先に農家や農地の回復がなされることになっている。すでに多くの補助・減税を行っているにもかかわらず、農業の生産額・所得の減少傾向には歯止めがかからない現状がある。

また、日本の農業を活性化させよという課題そのものがあまりに広すぎて、生徒自身の切実性が生まれにくいという点も配慮が必要である。そこで、若者の「農業離れ」を懸念する声を藤田志穂氏の『ギヤル農業』の中から代弁し、若者に農業の大切さ、重要性を強く訴えようというメッセージをうけとめさせることにした。その問題提起を受けた生徒たちは、日本の農業が抱える問題点をふまえた上で将来をすべて悲観的に考える志向性から開放され、新たなビジネスチャンスとしての農業、日本の再生を後押しする農業、若者が支える農業の姿を思い描きながら、自由に自分たちのアイデアを交換しあう雰囲気醸成されるのである。

(2) 話し合い活動の指導

全体の話し合いの前に、小集団での話し合いの場面を設定することは、生徒の話し合い活動に対する抵抗感を軽減させ、自分の考えがより鮮明になったり、どのような根拠をもっているのか、なぜそう考えるのか理由をはっきりさせたり、自分の考えに対する周りの評価から自信をもったりするものである。また、話し合いに慣れてきたら、今度は違う考えをもった生徒同士で話し合いをしたり、多様な考えにふれることによって、自分の考え方が広まったり、深まったりすることが期待される。

つまり、下のような流れに沿って話し合いをすすめることによって、さらに全体での話し合いを受けて、自分の考えを振り返り、自らの価値観を問い直す契機となるのである。そのためには、まず初発の



段階での自分の考えをもち、それが仲間を受け入れられたという承認欲求の充足がなければ、全体での話し合いへの参加意欲も薄れ、自己の内面を反省するようなきっかけも生まれてこない。

そして全体での話し合いの前に小集団を間にはさむことは、意見が言いやすい雰囲気や場をもつことが容易であり、一人一人が意見をいう機会が増えることも利点である。

グループで話し合った内容を、いろいろな項目ごとに優先順位をつける活動がダイヤモンドランキングである。この手法によって、多様な意見の存在に気づかせることができるとともに、一つ一つの項目を吟味しながら、その重要性を取捨選択する中で、次第に思考力・判断力を高めることができる。その思考の過程を最終的に文章で論理的に表わることによって、表現力も養うことが期待できる。こうした活動の評価については、まず論理的な文章構成になっていることだけではなく、ある項目についての両面からの考察がなされているか、メリットだけでなく、デメリットや批判的な考察ができているかなどは評価の基準となる。

(3) グループ討議のテーマ

話し合いの課題となるのは、若者たちの農業離れの原因を挙げること。そして、私たちも農業をやってみようという動機付けとなるプロジェクトを提案することの2点である。当然、農業離れの原因として、農家の低い収入、重労働環境、かっこよくない、などの意見が出されることだろう。それでは輸入を日本は続けていけばいいのか、という問に対しては生徒の意見は、輸入依存からの脱却を望む声が高い。その理由として、食料輸出先の経済状況、作付け状況、収穫状況の変化に左右されること、地球環境の変化によって異常気象がいつおこるか予想不可能であること、2007年の穀物価格の急騰による食糧危機以降、世界の農産物資源を困り込む傾向（海外農地の争奪、いわゆる“ランドラッシュ”や輸出制限措置など）、穀物を育成する条件としての水資源の枯渇（アメリカ中部のオガララ帯水層など）といった前時までの学習内容が引きだされてくることを期待したい。

そうした危機意識を土台に、これからの食の将来について生徒たちはさまざまなアイデアを出し合い

ながら、日本の農業の将来を見据え、ひいては、1970年代以降減反政策によって農地を余らしてきた日本の農業政策への批判的見解、あるいは、将来の新たなビジネスチャンスとしての農業の再生の道筋といった、イメージの逆転、転換を体験することになるであろう。

また、出されたアイデアについての質疑応答などから、他者の意見を受け入れ、また自分自身の考えともつきあわせながら自分の認識を深め、変容させていく柔軟な姿勢をもつことこそ大切である。最後には自分の意見を整理して論理的にまとめることで一つの結論を導くことができる。

このように本単元では、ある社会問題の考察や分析を通して、課題の発見からその課題の克服に向けての具体的な方策を導き出し、さらに他者との意見交換を通して、再び自分の意見としてより改善させていくことが社会認識の深化を促し、よりよい社会の実現を目指す資質を培うことができると考えている。

5 本時の展開

(1) 学級所見

全体として、活動的で華やかな雰囲気を醸し出す女子生徒がクラスの牽引役を果たしているのに対し、男子生徒には強い統率力や存在感を示す生徒は少ない。授業中の態度は、男子・女子ともに自由な発想を素直に表現する生徒がおり、誰からともなく意見がでてくる雰囲気がある。反面、授業への集中力に欠ける態度を示す生徒もおり、全体が“締まらない”雰囲気になり、担任としても注意を促しているところである。ただし、教師の発問に対する発言や、授業内容への興味・関心を素直に表現し、疑問や質問を躊躇無く口にできる生徒も多く、特に今回の発表形式の授業においてはそうした積極的な発言や態度を期待したい。

(2) 指導案

	生徒の活動	指導上の留意点	資料等
導入 7分	<p>○3種類の米を見せる。</p> <p>違いや特徴はどこ、なんという種類の米かな？</p> <p>インディカ米（長粒種）：インド種 食感はぱらぱら、日本人はあまり好まないが、世界的に多くたべられている。</p> <p>タイ米：インディカ米、米不足のときに日本に大量に輸入された</p> <p>ジャポニカ米（短粒種）：日本のお米。</p> <p>○農業についてのイメージを紹介する</p>	<p>・米の形、色、においなど特徴をつかませるように観察させ、興味を持たせる。</p> <p>・悲観的な意見が多いなかで、農業の重要性を指摘する声もあることに気付かせ、本時の課題を意識させる。</p>	米 アンケート調査
	<p>○お米を作った人：藤田さんの活動を紹介する</p> <p>なんでギャルが農業を？</p> <p>→シブヤ米の紹介と藤田志穂さんのメッセージを読む</p>	<p>・藤田さんの言葉に込められた、若者に農業の大切さ、重要性を強く訴えようというメッセージをつかみとる。</p>	資料
展開1 13分	<p>○どうして農業は人気がないのだろう？</p> <p>→儲からない、きつい、辛いなど生徒の意見を出させる</p> <p>農家の所得の資料からわかることを指摘する。</p> <p>○データ 39万㊦ これ何の数？</p> <p>耕作地の放棄：どこの自治体が一番大きいか、生徒に予想をたてさせる。</p> <p>関東地方と山間部（中国・四国・東北）で放棄地が増えている原因は何だろうか。</p> <p>資料 農業経営者と後継者をみる</p> <p>あらためて39万㊦の土地が余っている現状＝どう思うか、生徒の感想を聞いてみる。</p> <p>→大きすぎ、ムダ、もっと有効に使えないかな、なぜこんなに土地が余ってしまったんだろう。</p> <p>国はどんな政策をしているの、このままでは日本の農業はどうなるのか心配など。</p>	<p>・農業の抱える問題を下記の3点に整理する。①働く人の減少 ②耕作放棄地③消費者の意識</p> <p>農業所得に比べ農外所得に頼る農家の実態から、農業経営の困難な状況を理解する。</p> <p>耕作放棄地のデータマップを読み解く</p> <p>山間地域の多い中国・四国は高齢化</p> <p>平野部の多い関東地域は都市化</p> <p>経営規模の大きい北海道、東北、北陸地域が低くなっています。関東地方には都市化の影響があることに気付かせる。</p>	資料

	生徒の活動	指導上の留意点	資料等
展開 2 25 分	<p>○農業に魅力を感じている若者の姿を紹介する。</p> <p>○グループ討議</p> <p>農業に対する若者の人気が高い理由をあげなさい。そして、『こうしたら私たちも農業をやってみよう！』というプロジェクト』のアイデア出し合う。</p> <p>提案された企画について、農業を活性化させることに貢献すると思われるものから順番にダイヤモンドランキングに記入する。</p>	<p>・日本の農業が抱える問題点をふまえた上で、新たなビジネスチャンスとしての農業にたずさわる人々の姿から、農業の新たな道筋を考えるきっかけをつかむ。</p> <p>・話し合いの雰囲気をつくる。</p> <p>・一つ一つの内容を吟味しながら、その重要性を取捨選択させる。</p>	雑誌「AGRISM」
まとめ	ダイヤモンドランキングの順位を決定した理由をワークシートにまとめる	・他者の意見を受け入れ、また自分自身の考えともつきあわせながら自分の認識を深めさせる。	

本時の評価

1. 日本における農業や農家の抱える問題について、統計・資料から読み取り、その特徴や変化をとらえることができたか。（関心・意欲・態度）（資料活用）
2. 若者の農業離れの要因となっている事柄を理解し、その相互の関係を理解することができたか。（知識・理解）
3. 発表者の声に耳を傾け、内容について、メリットだけでなく、デメリットなど批判的な考察ができていたか（関心・意欲・態度）（思考・判断）
4. 日本の農業の将来について、自分なりの意見をもち論理的にまとめることができたか。（表現）

シブヤ発、農業プロジェクト

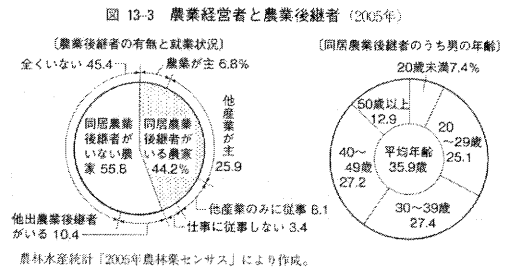
いま、挑戦したいこと、それは「農業」です。

現在、産地偽装問題や食糧自給率の低下など、私たちが生きていくうえで大切な「食」を取り巻く悪いニュースをたびたび目にし、耳にするようになっていきます。その度に、「日本の『食』の将来は、どうなってしまうんだろう」と心配になります。日本はいま、海外からたくさんの食品を輸入しています。

単純ですが、自分の国でできることはまず自分たちでやる、食料についても自給率を高めていかななくては。そうした強い思いにかられました。そこで私は、農業についていろいろと勉強はじめ、実際に農家に足を運び、いまの農家の現状を聞いたりする機会をつくりました。最近よく聞かれるようになっていますが、日本では若い人たちの「農業離れ」が深刻です。「後継ぎがいなくて、もう農業を続けられない」という問題があちこちで起きています。普段何気なくスーパーへ買い物に行き、お米や野菜を手にした私でしたが、こうした事実が気づくことで、スーパーや八百屋さんで見かけるお米や野菜に対する見方が少しずつ変わっていききました。そんななか、「若者を中心に農業を盛り上げていけば、きっと日本の農業がかわっていくんじゃないか、」そう考え、私にできることとして、「若者に興味を持ってもらえるキッカケづくりをしよう」と決心しました。

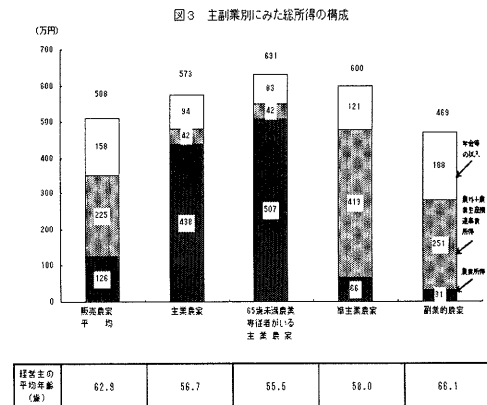
藤田志穂著『ギャル農業』（中公新書、2009）

農業経営者と農業後継者（05）



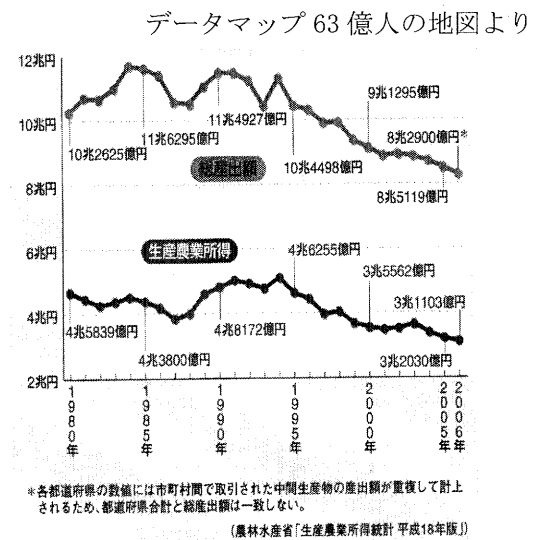
（国勢図会 2009/10 より）

農家の所得 平均 508 万円



（農林水産省より）

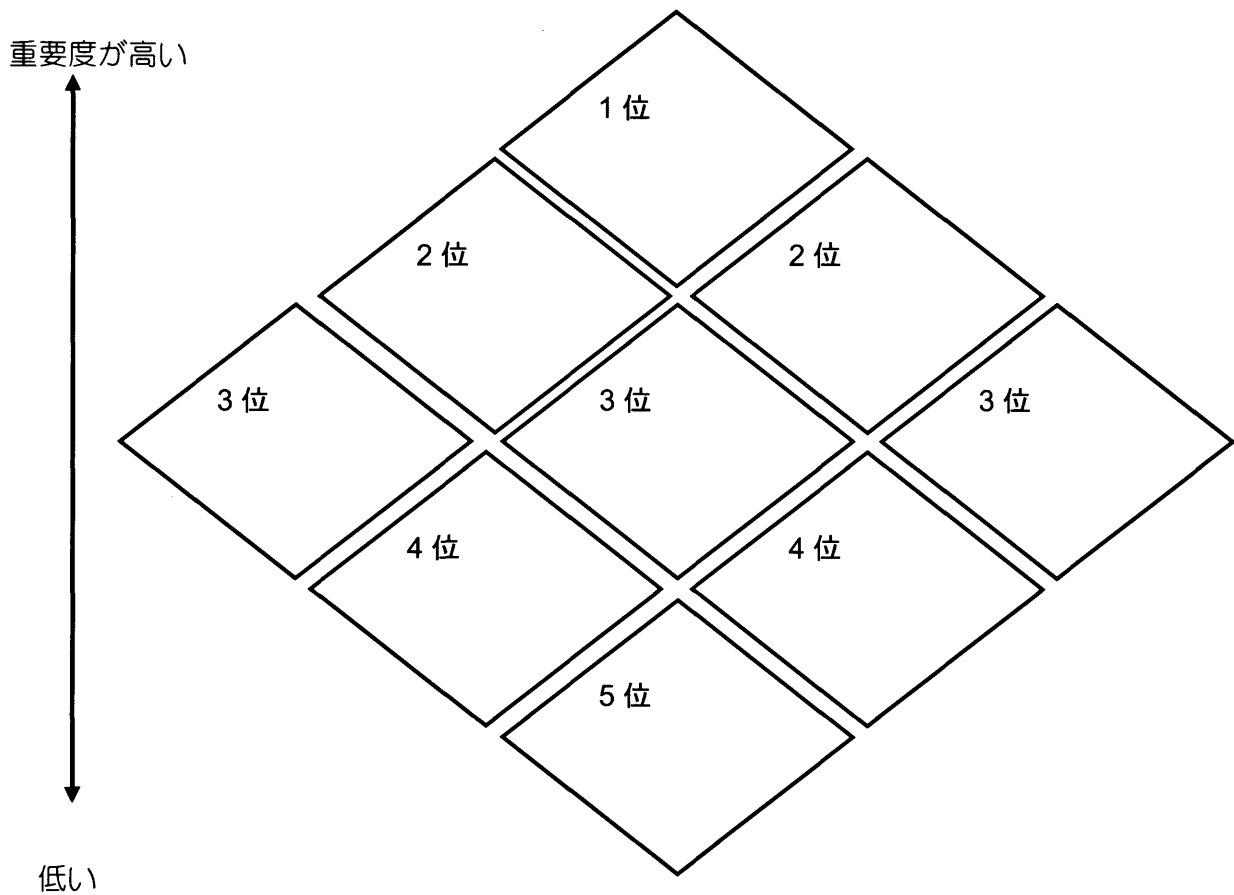
農業生産額と所得の推移



1年 組 番 氏名

私たちはいつまで安心して“食べること”ができるのでしょうか。これからの農業の未来、食の将来はどうなるのでしょうか。

- {グループで} 農業に対する若者の人気度が低い理由をあげなさい。そして、『こうしたら私たちが農業をやってみよう!』と思うプロジェクト』のアイデア出し合い、ボードにまとめなさい。読みやすく、一目で内容が伝わる工夫をしよう。時間7分
- {個人で} 発表を聞きながら、農業を元気にするために最も大切だと思うものを1つ、2番目に重要だと思うものを2つ、3番目に重要なものを3つ・・・というように、ダイヤモンドランキングにまとめなさい。



- ランキングを決めた理由を説明しよう。(どんな効果があるか、問題点はないのか)

Ⅲ 実践のまとめ

農業を活性化させる対策として最も多かった生徒の意見は、「政府による金銭面での支援体制の充実」を求めるものである。例えば、金銭面での所得補償や所得の安定をはかる支援金、農業を始める者に対する一時金の支援、減税対策などがその主な内容である。

農業を活性化するプロジェクト提案事項

(生徒の支持が多かったもの)

- ・農家を目指す人への一途税金の免除、支援金の交付
- ・農業を企業化する（固定給を導入し、収入を安定）

少数の意見

- ・耕作放棄地の無料提供・義務化して楽しい事を体験してもらう
- ・TVで農業の様子をPR・教育指導要領に入れて小学校の時に楽しい体験をしてもらう
- ・日本でしか作れない作物を積極的に海外へ輸出する
- ・地方の名産品を開発する
- ・アニメのキャラクターなどをプリントした商品を開発する

平成22年4月からは、新政権の発足により農家の戸別補償制度が始まるが、生徒たちは農家の経済状態は決して安定していないことはよく知っている。それだけに、将来の安定的な食糧確保のためにも農業人口の減少や生産力の低下が招く事態の深刻さを考えれば、「まずは国が何とか対策をうつべき」という意見が多くなるものである。しかし既に農家の税制上も手厚い保護を受けていることも事実である。農地の固定資産税は大幅に軽減されているばかりでなく、相続税も納税猶予や減免措置が大幅に認められている。また、地震や台風などの災害時の復旧に際しては、農家は真っ先に補助金が支給され、農地は税金で復旧されるようになっている。農業は国の根幹であり、農業は手厚い保護を受けているにもかかわらず、いっこうに農業人口の減少が

下げ止まるがないのが現状である。農業生産者に対する保護を拡充することが必ずしも農業の発展に結びつかないという側面もある。

こうした問題に対して、積極的に農業を発展させていこうという意見も生徒の支持を多く集めている。そのキーワードは「企業化」である。農業は戸別単位で取り組むものという発想から脱却して、企業としてのビジネスモデルを確立することを目指している。例えば、育成した作物それ自体を売るのではなく、付加価値の付いた商品として売っているものである。健康ブームにあった美容に優しい野菜や作物を栽培して、美容に効く素材を活かした料理を食べられるカフェを運営したり、米を使っていままでない新しい商品を開発したりするのである。生徒の意見からは、有機栽培でつくった米をつかったおにぎりカフェレストランの経営や、食用とまらない米を大量に飼料に使うなどの発想の転換、今後経済発展が期待される中東のドバイなどの地域への米商品の輸出など、奇抜なアイデアが出されている。こうした積極的に農業を新たなビジネスチャンスとして再生させていく試みは、今後の農業の発展に欠かせない要素であるといえよう。

ダイヤモンドグラフで上位を占めているものの半数近くは、「政府の支援」と「企業化」であるが、他にも生徒から支持された意見として「農業体験の充実」「耕作放棄地の提供」「農業のPR作戦」などがあげられる。特に農業体験については、前述のアンケート調査により多くの生徒たちが小学校時代に経験していることから、土にふれあう機会を積極的につくっていくことの重要性が改めて浮き彫りになった。また、耕作放棄地の提供については、2009年農地法の改正で、所在先の不明な農地の貸し借りは自治体の判断でできるように制度が整備されるようになってきている。あとはいかに活用するのかという問題である。日本政府は2013年までに放棄地をゼロにするという目標を立ててはいるものの、いったん放棄された農地を復元するには多大な出費と労力が必要とされるばかりでなく、どんなに手を尽くしても畑に復元することの困難な土

地も多い。農家の高齢化がすすみ、いまどこに自分の農地があって、それがどのように活用されているのかをわかっている人は少ない。仮にこれから農業を始めたいという人がいたとしても、耕作放棄地に関しては農地の需要と供給のバランスが崩れている。今後の農業の活性化を図る上で、若い人の食や農に対する関心が高まっていることをバネに農業にたずさわる人を増やしていくことは大切な事である。その後ろ支えとして、農業が集約的にお金の稼げる魅力ある業界であることをアピールして、生産性を高めるチャンスにつなげていくことが必要であろう。

IV 成果と課題

前述のように生徒の側から提案された農業を活性化させる意見の中には、政府の支援のあり方を問い直し、さらに新しい農業の企業化という姿を見通すような積極的な意見が出てきたことは大きな成果であった。生徒の意見や感想からさらにその意識を探ってみたい。（下線部筆者）

A（女子）天候に左右されやすい農業は収入が不安定だからやりたがらない人は多いと思う。けれど、お米はどちらにしろ必要だから、企業化したら収入は安定するし、むしろ高収入になるのではないかと思った。耕作放棄地の土地を提供するというのは、いいとは思いますが、野菜を何度も作っていると土の養分がなくなり、いい野菜がとれなくなってしまう。その分のお金がかかるのではないかと考えた。

B（女子）政府の支援と企業化は収入が安定して良いと思う。また、日本は少ない面積でたくさんのお米をつくるので、輸出するのは収入が増して良いと思う。PRは世の中の人たちにこんな仕事があると知ってもらっただけでやっぱり“大変だ”というイメージは変わらないと思う。あと耕作放棄地の提供は人手不足の農家が多い中で土地をほしがる農家が少ないのではないかと考えた。

C（男子）まず、企業をつくるのは収入が安定して、農業がやりやすくなると思うので1位にしました。「世界に輸出する」は、新しい動きができて農業が

活発になるとは思いますが、その前に自給率をあげないといけないと思う。

D（男子）まず補助金制度があれば活性化と思う。そして子どもに農業がいかに大切かということもわかっただけで、プラスして減税で農業がしやすくなって、新たに農業を始める人が増えるといいと思う。

生徒の感想から、様々な提案事項を序列化するダイヤモンドランキングを行った成果として、ある意見を支持する理由は何か、また懸念される事柄はどんなことなのか、についての論理的説明が明確になされていることがあげられる。また、日本の農業の問題は国内にとどまらず、世界的な食料事情の懸念へとつながる問題であることにも気付かせることができた。しかし、こうした視点は中学3年生における公民的分野でも関連する課題である。今回の授業を通して、中学1年生における地理的分野の学習と公民的分野と連携させた授業を今後とも取り組んでいくことが今後の課題である。

注ⁱ 本校生徒を対象とした「日本の農業に関するアンケート」より

注ⁱⁱ 統計資料『日本国政図会 2009/10』（矢野恒太記念会）より

注ⁱⁱⁱ 財部誠一著『農業が日本を救う』（PHP 研究所、2008）p. 10

<引用・参考文献>

- 1) 柴田明夫著『食糧争奪』（日本経済新聞出版社、2007）
- 2) 柴田明夫著『資源争奪戦』（かんき出版、2010）
- 3) 白井裕子著『森林の崩壊』（新潮新書、2009）
- 4) 堤 未果著『ルポ 貧困大国アメリカⅡ』（岩波新書、2009）
- 5) 藤田志穂著『ギャル農業』（中公新書、2009）
- 6) 大泉一貫『日本の農業は成長産業に変えられる』（洋泉社、2009）
- 7) 財部誠一著『農業が日本を救う』（PHP 研究所、2008）
- 8) 統計資料『日本国政図会 2009/10』（矢野恒太記念会）
- 9) 『今がわかる時代がわかる日本地図 2009 年版』（成美堂出版）
- 10) 『今がわかる時代がわかる世界地図 2009 年版』（成美堂出版）
- 11) 『データマップ 63 億人の地図 経済の地図帳』（アスコム、2005）